

本当の優しさ



小林東方学校給食センターの調理員さん方が、臨時休校で給食が準備できない期間中に、隣の小中学生のためにマスクづくりをされたそうです。その愛情たっぷりのマスクが須木中学校の全校生徒にも届



きました。生徒たちも心を込めてお礼を



しました。これもコロナが与えてくれた学びの機会です。

学校再開!

コロナウイルスに負けない!



五月十八日(月)から須木中学校も通常登校ができるようになりまし。長い臨時休校や変則的な学習と自学自習など

で落ち着かない毎日でしたが、やっと通常の登校ができるようになりまし。友だちと話したり、普通に授業を受けたりと、当たり前だった日常が学校に戻りつつあります。しかし、油断は禁物です。これまで同様、手洗い・うがいや換気はもちろん、三密を意図しての新しい生活様式で毎日を過ごします。自粛

や我慢してできなかった事を、しっかりと取り戻して充実の学校生活にして欲しいと思います。「時間」を大切に活用しよう。今回のコロナの件で、たくさんの方々が考え、学ぶ事も多々あったと思います。感じたこと、考えたことを行動(実践)にして欲しいと願います。私たちも、これまでの授業(学校)とこれからの授業(学校)を真剣に考えるよい機会となりました。臨時休校前の日常に戻すのではなく、新しい日常としての学校経営を進めていきたいと考えます。ピンチをチャンスに変えます。

須木中通信



日常がもどったよ

「創造的休暇」

科学の分野で「奇跡の年」と呼ばれている年があります。それは1666年、アイザック・ニュートンが万有引力の基礎を作り上げた年。興味深いのは、その背景です。1665年、ロンドンではペストが大流行し、ニュートンが通っていたケンブリッジ大学は閉鎖されました。仕方なく故郷に帰ったニュートンは、一日中研究に没頭しました。たった一つでも大発見なのに、万有引力の法則に加え、微分積分法、光学理論をニュートンは発見したのです。いわゆる「ニュートンの三大業績」です。驚くべきは、三大業績の全てが18ヶ月の間に成し遂げられたことです。この期間のことを、後にニュートンは、「I was in the prime of my age for invention.」——【創造的休暇】と述べています。

それまでのニュートンは、決して目立った学生ではありませんでした。しかし、この【創造的休暇】に学問に打ち込んだことで、社会を一変させ、後の世に語り継がれるような業績を残したわけです。歴史は教えてくれます。歴史を学ぶと希望が生まれる、ということなのです。「コロナで、いろんなものを奪われてしまったかもしれないけど、自分の意志だけは、誰からも奪われることはありません。いま自分のやるべきことに集中しましょう!」

どうですか?このニュートンの「創造的休暇」3月から5月にかけて臨時休校で長い休みとなりましたが、ただの休みで終わってしまった人、「創造的休暇」として考えて行動できた人の格差が生まれたのでは…。と心配です。

6月の主な行事予定

- 1日(月) NRT検査
- 2日(火) NRT検査
- 3日(水) 国語コンテスト
- 4日(木) 不審者避難訓練
- 12日(金) 読み聞かせ (1・2年生)
- 18日(木) 全校集会
- 19日(金) 歯科検診
- 23日(火) 高齢者理解授業
- 24日(水) 学力診断テスト
- 26日(金) 学力診断テスト (3年生のみ)
- 29日(月) 生徒総会
- 30日(火) 中間テスト

映画のタイトルは、『Fukushima 50』というメディアが、東日本大震災の時、福島第一原発の被害を最小限に食い止めた50人の作業員に敬意を表して使った言葉だ。観客はこの映画を観て、たった一つの事を



あの中でこんなことが起きていたのか」と。本当はもつと早く知りたかった。しかし真実を明らかにすることの難しさがあつた。原作『死の淵を見た男』の著者・門田隆将さんは、取材をすべく福島第一原発の吉田昌郎所長に接触を試みるも、東京電力の規制が厳しかった。そこで吉田所長と親しい人を訪ね歩き、その人たちから説得してもらい、ようやく会って話を聞くことができた。震災から一年四ヶ月が経っていた。吉田さんは食道癌で療養中であつた。東京電力本

社と吉田さんが室長を務める緊急時対策室とのテレビ会議の様子や、放射線量が致死量を超える原子炉建屋に二人ずつ突入して、爆発を防ぐために作業した事など、あの時の全貌を包み隠さず吉田さんは語った。さらに吉田さんの口添えで、作業員一人一人と接触し、取材する事もできたらしい。この本を読んで映画化に踏み切ったのは角川映画の角川歴彦さんである。角川氏は、吉田所長とあつた50人の命がけの闘いを、どうしてもメディア

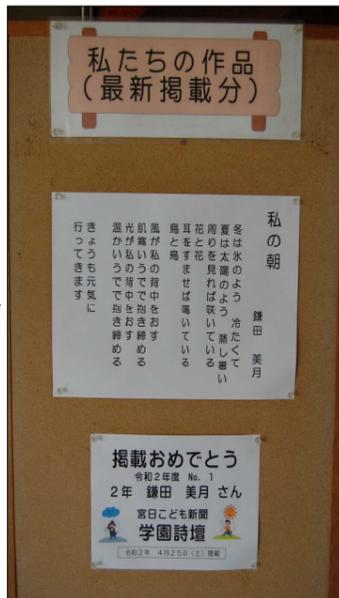
の中で最も影響力のある「映画」で再現したいと思ひ、制作を買って出た。さて、『Fukushima 50』は、事が起きた後に過去の真実を描いているが、今起きている新型コロナウイルスの大惨事を、まるで予言したかのように描いた映画が二〇〇九年に公開されている。

「感染列島」である。ある日、フィリピンの山奥の村で鳥インフルエンザが発生する。WHOの介入で感染を封じ込めたかに見えたが、一人の男が結婚式の土産にするために、村から鶏を一羽持ち出していった。男は舟に乗り街へ向かった。既に男はウイルスに感染していた。場面は新年の日本に切り替わる。ある都市の総合病院を若い夫婦が受診に訪れる。その数日前、東南アジアで医療活動をしていた妻の父親がお正月で帰省し、この夫婦と一緒に過ごしていた。父親が再び現地に戻った後、夫は体調を崩す。医師は風邪と診断し、念のためにインフルエンザの検査も行った。翌日、夫の様態が急変して病院に搬送される。検査結果は得体のしれない新種のウイルスだった。緊急入院と隔離の措置がとられた。慌てて医療スタッフはマスクを着用するが、

時すでに遅し。ウイルスは妻にも、対応した医師にも感染し、さらに医療スタッフから患者へ、外来患者から街へと拡大する。そして感染は、じわじわと日本中に広がる。随分前に見た映画であるが、今、まさに世界中が同じ現象にある。気がつくとも世界が被災地になってしまった。そんな中、日本は原爆や大震災など、未曾有の苦難をいくつも乗り越えてきた国である。今の現実はやがて過去のものとなり、語り継ぐ記憶になるだろう。「負けねえぞ!」こんな東北の言葉が聞こえてきそうである。

世界に見せよう「負けねえぞ!」の精神

宮日こども新聞掲載



表現力豊か!

言葉はもちろん、歌や絵などでも、自分の感情を上手に表現できる人は魅力的です。そんな表現力が豊かな人に、憧れを抱く人も多いのではないのでしょうか。須木中学校では、生徒たちが積極的に新聞投稿に挑戦し、表現力や感性を磨いています。

佐野さん曰く、表現力が豊かな人は、ちょっとした言葉の違いや組み合わせで、相手に伝わる印象が大きく変わります。例えば、「好き」という感情を表現するにしても、「愛おしい」「大切に想っている」「心惹かれるなど、色々な言葉の候補があるが、語彙力に優れ、相手や場面によって言葉を選べるのも、表現力が豊かな人の特徴であるとの事でした。

四月二十五日の宮日こども新聞に、二年生の鎌田美月さんの作品が掲載されました。この作品が、素晴らしい投稿だったので私が可憐に投稿したら、その投稿を見つけた宝

私たちの作品 (最新掲載分)

私の朝
冬は水のように冷たくて
春は太陽のよう 照らして
花と花を見れば 咲いている
耳をすまれば 聞いている
鳥と鳥
風が私の背中をおす
肌寒いうつで 動き始める
温かいうつで 動き始める
さよなら元氣に
行ってきます

掲載おめでとう
令和2年度 No. 1
2年 鎌田 美月 さん
宮日こども新聞
学園詩壇
令和2年 4月25日(土)掲載

